BULLETIN

Volume 22 ― No. 6
18 November, 2021
ACN 058 396 642 / ABN 63 058 396 642　通算　第２３０号
浄土真宗本願寺派オーストラリア開教事務所

Hongwanji Buddhist Mission of Australia

シドニー本願寺報

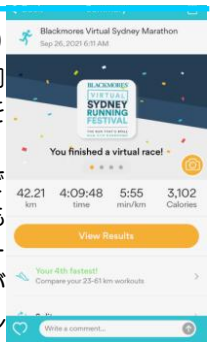
32 Burra Road, Artarmon 2064
PO Box 292 Lindfield (Sydney)
N.S.W. 2070 AUSTRALIA
Phone : (02) 9403 - 1256
Email: hbma@optusnet.com.au
http://www.hongwanji.com.au

11 月 28 日（日）に、今年度の報恩講法要がお勤めされます。親鸞聖人を追悼する中で、今お念仏の教えに出遇えたこの身の幸せに感謝致しましょう。お昼は持ち寄りです。宜しくお願い致します。合掌

恒久的世界平和と「シドニー本願寺」建立を祈念し、バーチャルシドニーマラソン42.195kmを走りました！

2021年9月26日

(左)最初伴走してくれた家内と出発。(右)最後の14kmを自転車で伴走してくれた息子たちと　(26/09/2021)



今年は去る9月19日が、シドニー市内の風光明媚な場所を走るシドニー･ランニング・フェスティバルの開催日でしたが、昨年に続き今年もコロナの影響で実際のコースを走る全部のイベントが残念ながら中止となりました。そして昨年同様、バーチャルで全ての部門の大会が行われることとなりました。

ただ、今年のコロナ規制によって自宅から5㎞以内の移動しか認められていなかった為、自宅を出て、ノースシドニー方面、次いでリンドフィールド、最後にレーンコーブ方面を往復するというコースを設定し、このバーチャルマラソンを当初予定されていた大会日の翌週26日(日)に決行することにしました。

午前6時、気温は11℃のランニング日和の中、出発。最初は家内が伴走してくれ応援してくれました。最初の二つの方面は地形をよく知っていて快調に足を進めていましたが、最後息子たちが伴走してくれたレーンコーブ方面はあまり走ったことのない道で、蓋を開けると起伏の

（2ページへつづく）

もくじ

マラソンを完走　1-2
お寺の予定表　1
報恩講に際して　2-4
今月のことば　3
News 日曜礼拝再開＆写経クラス　4
ご　懇　念　録　4

★　お寺の予定表 - Calendar　★

Nov 21 (Sun) 11:00 am 日曜礼拝/Sunday Service
1:30 pm 写経クラス撮影会/Shakyo Trial session & photo shoot
28 (Sun) 11:00 am 報恩講(親鸞聖人のご命日法要) / Ho-on-ko Service
@ HBMA hondo / 開教事務所本堂にて
★ お昼は持ち寄りです/Please bring one dish to share! (Potluck lunch)
Dec 5 (Sun) 11:00 am 十二月祥月法要/ December Shotsuki Memorial Service
12 (Sun) 11:00 am 日曜礼拝/Sunday Service
19 (Sun) 11:00 am End of Year Clean up / おみがき
20 (Mon) 〔本願寺報発行 / New Bulletin Issue〕
31 (Fri) 5:00 pm New Year's Eve Service / 除夜会
Jan 1 (Sat) 11:00 am New Year's Day Service / 修正会
2 (Sat) Kakizome(Calligraphy practice at the beginning of the year / 書き初め

(上)今年は知ったコース
(下)今年度のバーチャルマラソン完走メダル

今回も以前受け取ったビブ(ゼッケン)を基に、タイプしたPEACE RUNを張り付けそれを、シャツにつけて走りました！

（1ページより）

2021年シドニーバーチャルマラソン

St Leonards 公園から眺めるオペラハウス(左手)とダーリングハーバーブリッジ(右手)。5km制限の中、今回走ったコースで唯一シティが望める場所。(26/09)

激しい道で苦戦を強いられましたが、何とかキロ平均6分以下で走ることが出来ました。

恒久的な世界平和とシドニー本願寺建立を念願しつつ、今年も無事に42.195kmを走り終えることができましたことをこの場をお借りしてご報告申し上げます。

完走タイムは、4時間9分48秒でした。自己ベストは更新できなかったものの、それ程調子がよくなかったので、無事に１キロを平均6分以内で完走することができたことは、大変うれしい結果でした！

今回も車道を走らない、信号を守る、等、交通規則はしっかり守って走り、水やエイドを受ける時は、その都度足を止めアプリの計測を止めていましたので、実際にかかった時間は6時間近くということで、終わったときは、「もう走らなくてもいいんだ！」とほっとした事でした。来年参加者が集って走る際には、是非4時間以内の記録を出したいと願いつつ、既にトレーニングを再開しています。持久力をつけ記録を伸ばせるように頑張りたいと思います。

今回のレースでも、途中で倒れることもなく、事故にも遭わず、怪我もせず無事に走り終えることができたことを、この体を授けてくれた両親、そして助言を頂いた先輩ランナーの皆さん、そして応援、支援して下さった全ての皆様に感謝したことでした。

今年度のマラソン参加に際し、ファンドレイジングの趣旨に賛同し、ご寄付に協力下さった、**静藤雄さん、岸田みゆきさん、シャーマン・ジョナサンさん、小野塚智子さん、秋吉壽和さん、**そして伴走してくれた家内の**由紀美**と、自転車で伴走してくれた**由信**と**頌**に今一度「ありがとう」と感謝の意を表したいと思います。このシドニーに近い将来オーストラリア初となる本願寺の恒久的な建物ができることを願いつつ、また来年に向けて頑張っていきたいと思っております。今後ともどうぞ皆様、ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

合掌
オーストラリア開教事務所長
渡部重信

法話：報恩講に際して

報恩講に際して

念仏往生の願により
等正覚にいたる人
すなわち弥勒におなじくて
大般涅槃をさとるべし
『正像末法和讃　第26首』

親鸞聖人

報恩講という言葉は、恩に報いる講(集い)と書きますが、この日は「自分にとって報恩講とは何か」と自問するご縁の日と思っています。「報恩」は、知恩つまり恩(徳)を知ることに始まります。ですから、その知恩を感じることが自分にとっての報恩講のご縁ではないかと思っています。

報恩の恩は、一般的な恩ではなく宗祖の教えへの恩徳を指しています。ですから、その教えに出遇うことができている有難さをしみじみと考える日であり、その恩に報いている生活を自分が今ちゃんとしているのかを自らに問い正す日であるということです。

それは言い換えれば、親鸞聖人の教えを確かに聞かせて頂いているのか、です。最初に言った知恩、恩徳を知る。本当に恩徳に遇っているのか。この確認こそが、報恩講に遇わせて頂く際、最も大切な事です。

親鸞聖人を語る前に、仏教の開祖である、お釈迦様についてお話をしたいと思います。

〇仏教とは仏になる教え

仏は梵語でブッダという言葉の音訳です。元々、ブッダという言葉は「目覚めた人」という意味の普通名詞です。特定の誰かを表しているわけではありません。インドの古代で言えば、目覚めた人はみんなブッダです。インドには今でもジャイナ教という宗教があり、お釈迦様と同じ時代に生きたマハーヴィーラという人が開祖です。この方もブッダと言われています。その後に仏教が発展していくと、ブッダはお釈迦様一人のことだということで固有名詞のように言われるようになってきました。

このように仏は「目覚めた人」という意味であることを考えますと、仏教という言葉の意味を次のように考えることができます。仏教は、「目覚めた人」が説いた「教え」だとすることができます。これはわかりやすいですね。ですが、お釈迦様は目覚めたけれども、まだ目覚めていない人には、「目覚め」の内容はわからないし、そもそも「目覚めた人」ということもわからない。そうしますと、お釈迦様を「目覚めた人」と受け止めることが、第一に問題になることです。ですから「目覚めた人」が、「目覚めた人とは何か」ということを説く教えということが、まず最初に重要になります。

お釈迦様の最初の説法にこのようなお話が残っています。

（3ページにつづく）

(2ページより)

法話：報恩講に際して

お釈迦様はお覚りになった後、元々一緒に修行をしていた５人の修行者たちに説こうとし、近づくと、修行者たちは「あの人は堕落した人だから立って迎える必要はない」と言い合います。しかしお釈迦様が近づくにつれ、はっとして修行者たちは「友よ」「ゴータマよ」と立って迎えたのです。しかし、お釈迦様はこう言います。

「私を修行を完成した者と呼ばなければならない、ゴータマと呼んではならない」

そして、「あなた方も同じように目覚めた人と成る」と言って教えを説こうとされました。しかし修行者たちは、あなたがなぜ完成した者であるのかと非難し「目覚めた人」であることをすぐには認めませんでした。お釈迦様は覚者の言葉に耳を傾けよと言うやりとりが３度繰り返され、遂に修行者たちが認め、教えが説かれ、その時、お釈迦様とともに５人の新しい目覚めた人(ブッダ)が生まれたのです。これが、お釈迦様の教団の始まりです。(初転法輪)

この修行者たちへの説法において、お釈迦様が「目覚めた人」であることを明らかにし、その覚りの内容を説き、そして新たに「目覚めた人」が生まれていったのです。ここに仏教ということの意義が明確に表されています。つまり、仏教は、「目覚めた人」とは何なのかを説く教えということが１番目の意義です。そして「目覚めた人」が説いた真理についての教えということが第２の意義です。さらに、その真理に「目覚めた人」に成る方法を説く教えということが３番目の意義です。ですから、お釈迦様の覚りによって何か救われるというのではなく、仏に出会って教えを聞き、同じ覚りに到るというところに、仏教の特徴があります。

このように仏教では、天国や恵みを与えられるのではなくて、覚りが与えられるわけです。その覚りが与えられるということによって「仏に成る」のです。つまり仏教とは、仏に成る教えです。これが他の宗教と違う特徴的なところです。キリスト教では、人間が神に成ることはありえません。神道でも、一部の名を遺し亡くなられた方が神として祀られたりしますが、神道の教えによって神そのものに成るということはないでしょう。しかし仏教は、覚りを得た人の教えによって、一人一人が目覚めた存在、「仏」に成っていくのです。

その方法がインドから中国、そして朝鮮半島、日本と渡って、教えに少しずつ違いがでてきますが、基本的には仏に成る方法を説いています。例えば天台宗の比叡山では、「千日回峰行」と言って、千日間にわたって山の中を走り回ったり、あるいはお堂に籠ったりする大変厳しい修行があります。これも目覚めるための修行です。また「座禅」も目覚める為の修行です。

その中で浄土系の仏教である、法然上人の「浄土宗」や、親鸞聖人を祖師と仰ぐ我が「浄土真宗」があります。私たちの教えは「阿弥陀仏の浄土に生まれる」ということを説いています。この浄土への往生は、極楽往生という言い方もします。勘違いされやすいのですが、それは楽なところ、楽しいところに行く話ではなく、仏に成りに行くのです。ですからこの楽は、私たちの思う楽ではなく、煩悩を滅した、涅槃という究極の楽を意味します。極楽は、そこで修行して目覚めるために行くのです。

そして、極楽浄土に生まれていくことを、「往生」と言います。往生は、阿弥陀様の本願力によって、凡夫である自分自身が極楽浄土に生まれて往くことを言います。昔から法話で「死ぬと思うな生まれると思え」と説かれてきま

(4ページにつづく)

今月のことば

人間（にんげん）そのものの
目（め）ざめを
呼（よ）びかけるものが
によらい　ほんがん
如来の本願である

中西（なかにし）　智海（ちかい）　一九三四～二〇一二

“What calls to us human beings to awaken To our true self is the Tathagata’s Primal Vow.”

***Rev Chikai Nakanishi** (1934 -2012)*

(『2021 法語カレンダー(真宗教団連合刊)』より)

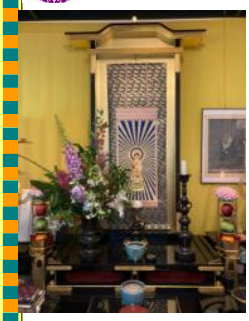
した。お浄土に生まれるというのは、阿弥陀様と同じ大きな悟りを得て仏となることです。親鸞聖人は、阿弥陀様の誓われた念仏往生の願（第十八願）によって往生することを真宗とされています。それも、死んだ後に往生が決まるのではなく、煩悩具足の凡夫が阿弥陀様のご本願に目覚め気づかせて頂いた時に、即ち真実信心を頂いた時、そのままの私の往生成仏が決定すると説かれています。それを「不退の位」とも「等正覚」とも説かれ、弥勒菩薩が必ず成仏するのが定まっているのと同じく、この世において必ず成仏することが決定すると説かれています。これを「現生入正定聚(この世で正しく成仏の定まった集まりに入る)」として、親鸞聖人の教えの要となっています。

ただ一般には「往生」を困って動きの取れない事として使われています。これは「平家物語」や歌舞伎で有名な弁慶の最後の場面で、弁慶が全身に矢を受けて、眼を見開いて立ったまま往生し、敵がその姿に一歩も動くことが出来なかったことから来ています。往生が死んで浄土に生まれることから、弁慶の死を意味するのですが、動きがとれない、困惑するという別の「往生」の意味が生まれたのでした。浄土真宗では、この煩悩をかかえたままの自分が、浄土に生まれて仏となるというのですから、これに勝る大きな喜びはありません。そこで詠まれたのが冒頭の和讃です

親鸞聖人は、自力の修行によって煩悩を断ち切って、悟りの境地に至る仏道から、ひたすら弥陀の本願を信じ、お念仏を申すという他力の仏道への大転換がなされたのです。これを回心(えしん)といいます。回心とは、これまでの生き方、生きるよりどころを180度転換することです。ご自分についてあまり語られなかった親鸞聖人が本典の後序で、「然るに愚禿釈の鸞、建仁辛酉の暦(1201年)、雑行を棄てて、本願に帰す」と告白されています。「あれやこれやと自己のはからいによる修行を棄てさって、弥陀の本願に帰命する」とおっしゃったのです。9歳で得度をされた親鸞聖人は、20年の間、比叡山で日々厳しい修業を行われました。しかし煩悩を棄てて悟りを開くという自力修行では覚る事ができず、悩まれた聖人は、聖徳太子ゆかりの六角堂に百日の参籠をされます。その95日目の明け方に、夢の中に救世観音の声を聞かれたのです。その声に導かれて、京の町で念仏の教えを説いておられる法然上人を訪ねられました。それからまた百日の間、雨の日も風の日もどんなことが起ころうとも欠かすことなく、上人の教えを聞かれました。そして、阿弥陀如来の本願によって、煩悩を断たずに往生を得ることのできる他力の教えに導かれたのです。その教えの要は　「本願を信じ念仏申さば成仏する」という事です。

この他力の仏道こそ、念仏の教えであり、その他力念佛の教えを今の世に伝えてくださっている親鸞聖人に感謝の意を表す日がこの報恩講なのです。　合掌

アーターモンの開教事務所にて礼拝再開
写経もできるように！



NSW州の外出規制も緩和され、10月17日より、日曜礼拝を無事再開することができました。是非またお参り下さいませ。まだ人数制限がありますので、お参りの際は、ご連絡をよろしくお願い致します。

また、開教事務所の本堂にて、週に二回ほど写経を始めたく思っておりますので、ご希望の方はお知らせ下さいませ。　合 掌

ご 懇 念 録

Expression of Dana/Gratitude

この一ヶ月間で下記の方々より総計 1790.00ドルのご懇志をご進納いただきました。また、お賽銭箱には、計12ドルが浄財として参拝者より喜捨して頂いておりました。この浄財は本願寺設立基金へ進納されました。有り難うございました。 合掌

In the past month, donations to the amount of $1790.00 were offered to the Amida Buddha through the Hongwanji Buddhist Mission of Australia. HBMA members and attendants have also deposited $12 in the donation box which also deposited to the Hongwanji Temple of Sydney Building fund. The HBMA acknowledges the donors and would like to express our sincere gratitude to the following for their generous donations:

* Rev Takashi Miyajima (QLD) – Membership contribution
* Ms Akiko Minami (QLD)– Donation for the Ohigan & Grand father's memorial service
* The Frost family – Observing funeral service for the late David Patrick Frost
* The Jo family – Observing 13th year memorial service for the late Akiyoshi Jo
* Mr Alan Jackson – Special Donation
* Ms Ayako Mitsui-Browne – Donations for Sunday Services
* Ms Hiroko Okuyama – Donation for Shotsuki services for her parents
* Mr Hisakazu Akiyoshi – Donation for Sunday Services and Peace Run
* Mr Jonathan Shearman – Donation for Peace Run
* Mr Fujio Shizuka, Ms Miyuki Kishida, Ms Tomoko Onozuka – Donation for Peace Run
* Ms Mayumi Saito – Donation for observing 7th year Memorial Service for her husband
* Rev S Watanabe– Shotsuki for his father, Tatsuo Watanabe
* Japan Club of Sydney – Printing honorarium (Oct and Nov 2021)

Thank you very much in Gassho

(From page 3)

Living to do the things we plan for the day and for the morrow, attached to life's pleasures and refusing to look suffering in the eye, we never notice the demon, Death, encroaching. Busied with everything else, we never even notice the days and nights passing by in a blur.

When you think about it, it's rather strange that we fear our own demise more than anything.
If what certain secular thinkers say is true and we are simply made for a life that's determined by meaningless random flux, then why are we so disturbed by its dissolution? If this is, indeed, our true nature, then why do we shudder at the "winds of impermanence" when they strike us? If there is nothing left but having to endure what the **Tannishō** *4 describes as this "fleeting world" and a "burning house" where "all matters without exception are totally without truth and sincerity" then why this visceral aversion to death? I would suggest that this has something to do with us remaining ignorant of what we really are (beings intended for eternity), rather than with simply losing those things we become attached to during our lives.

The Dharma has always recognized the precarious conditions of human existence but is never content to simply let matters rest at that; after all, an alert child could surmise as much about the world. Despite its sobering assessment of our condition, Shin Buddhism goes further. It offers a teaching of joy and illumination that can help overcome our existential crisis, if we would only immerse our inflamed hearts into its soothing waters. In the next part, we will explore how this 'medicine' can yield great benefit thanks to its liberating insights. When this transformation takes hold of us, we may come to declare, as Shinran did, that:

Although my defiled life is filled with all kinds of desires and delusions,

My mind is playing in the Pure Land.

In Gassho,
Rev John Paraskevopoulos

4 Arguably one of the most influential spiritual texts in Japanese history, Tannishō ('A Record in Lament of Divergences') is a short work from the late 13th century, believed to have been written by Yuien, one of Shinran's disciples. It offers a concise overview of Shin Buddhism and its key concerns, presented in an intimate, accessible and engaging style.

BULLETIN

HBMA shrine was beautifully decollated for the Sunday Service (17/Oct/2021)

Sunday Service re-started at the HBMA Hondo in Artarmon on 17 October

HBMA's Sunday Service at Artarmon finally started on 17 October after 4 months of lock down.
Since HBMA office moved to Artarmon at the end of July, we have been very patient waiting to resume our service.
Everyone in New South Wales celebrated this day of freedom. Even so, as we still have to follow the Covid Safety Plan, we can only welcome a limited number of visitors to the HBMA premises at the moment.

We are now planning to have Shakyo (写経: tracing Buddhist scriptures on a paper using a brush and ink, similar to calligraphy) class at HBMA.
Therefore, if you are interested in participating, please let HBMA office know about it. We'll be arranging a couple of class. In Gassho,

Please attend

HO-ON-KO SERVICE

When : Sunday 28 November 11am～
Where : HBMA Hondo at Artarmon

Please join in to attend the Ho-on-ko service commemorating and celebrating the life of **Shinran Shonin**, the founder of Jodo Shinshu.
Together, let us show our appreciation to Shonin! Those who plan to attend the service, please let HBMA office know that your attendance on the day. Please bring one dish to share with everyone!

In Gassho

Last year's Hoonko Service was observed with the presence of Rev John Paraskevopoulos

(From page 2)

So, what is the nature of our illness that requires such radical intervention? As much as we seek to find fault in others, and the world generally, it's important to see that the root of our troubled existence actually lies in ourselves. Our ordinary human disposition is such that we are fundamentally driven by fear and dissatisfaction. As Shinran says:

Shinran Shonin

> **Our desires are countless, and anger, wrath, jealousy and envy are overwhelming, arising without pause; to the very last moment of life they do not cease, or disappear, or exhaust themselves.**

Confronted with this stark realization, people look for ways to suppress the acute anxiety to which it gives rise. In seeking to protect ourselves from emotional vulnerability and discomfort in the face of threats to our wellbeing or self-regard, we often succumb to misguided reactions. When unhappy, we may project feelings of anger or inadequacy onto others, blaming them for what are – in truth – our own shortcomings. In doing so, we try to feel better about ourselves rather than take responsibility for honestly coming to grips with our lack of awareness. This is, indeed, what determines the unenlightened life of everyday people *(bombu)* "whose greed is profound, whose anger is fierce and whose ignorance smoulders" as **Kakunyo** *2 reminds us.

Kakunyo Shonin

Shinran spoke of the 'snakes and scorpions' that we harbour in our minds, which are part and parcel of what he referred to as *bonnō* (disordered desires that bind us). These can be very painful so, in the absence of an enduring solution, we may attempt to anaesthetize ourselves from such feelings by seeking relief through an excessive preoccupation with food, alcohol, sex, gambling or reckless behaviours that may become addictive.

And yet, trying to 'cauterize' the wounds of our heart in this way does not lead to true healing. It only causes further trauma in which we continue to hurt both ourselves and others.
This is because, as Shinran says, we are "possessed of defilements and wrong views"; being bereft of wisdom, we lack "a true mind and a heart of purity". This can have tragic consequences for us. Seeing as we often like to think of ourselves as successful and intelligent – and that we 'have it together' (more so than others whom we then judge accordingly) – we fail to see, as Zonkaku reminds us, that:

> **Common hearts of the defiled world, possessed of both the clever and fools alike, cannot be said to be very different … There are the noble and the lowly, but suffering is something that afflicts both in ample quantity.**
> **The poor and the wealthy cannot be said to be the same, but they are identical as far as not being free from distress.**

The other difficulty we face is a deeper problem of which the others are but manifestations. The transient nature of all things including, of course, our lives are a constant reminder that everything we know of this world will end. In the poignant words of **Rennyo**: *3

Rennyo Shonin

> **Existence is as ephemeral as a flash of lightning or the morning dew, and the wind of impermanence may blow even now. Yet we think only of prolonging this life for as long as possible, without ever aspiring for the afterlife. This is inexpressibly deplorable.**

We appear to suffer from a kind of amnesia when it comes to death, as if it will never tap us on the shoulder, especially if we're young, healthy and seemingly invulnerable. But Zonkaku observed that:

(Continues on page 4)

*2 **Kakunyo** (1270–1351) was third *Monshu* ('head-priest') of the Hongwanji school of Shin Buddhism.
He was the first to compile an account *(Godenshō)* of the life of Shinran, who was his great-grandfather.

*3 **Rennyo** (1415–1499) was the eighth *Monshu* of the Hongwanji school and played a vital role in consolidating the fortunes of this tradition, for which he was celebrated as the 'Second Founder'. He inaugurated significant liturgical reforms and is especially famous for his pastoral letters *(Gobunshō)*.

(From page 1)

Peace Run Virtual Marathon 2021

BLACKMORES SYDNEY RUNNING FESTIVAL 20TH RUNIVERSARY

companied their dad by riding their bikes as support staff to supply drinks and some energy food, as this course was the hardest of the day due to the many hills present on this route, especially River Rd West to Penrose St.

Sho (left) and Yushin (centre) accompanied their dad for final hardest section of the day riding their bikes. (26/09/21)

The temperature on this day was mild and it was again an ideal day for the marathon at 11~17 degrees Celsius.

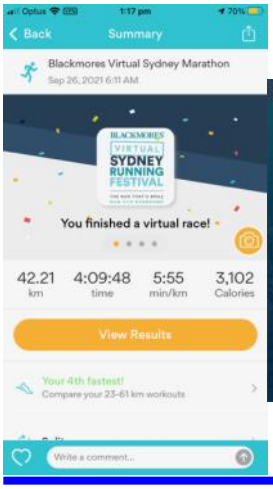
Finally, after running 42.2km they returned home and Reverend Watanabe's time this year was 4 hours 9 minutes and 48 seconds!

He finished in 195th place among 502 participants, and 145th place out of 307 in the men's category.

After goal in, he was showing the finisher's T-Shirt which he received when he first in 2019. (26/09/2021)

A big "Thank you" goes to **Mr Fujio Shizuka, Ms Miyuki Kishida, Mr Jonathan Shearman, Ms Tomoko Onozuka, Mr Hisakazu Akiyoshi** for their contribution towards this occasion. Your kind donations were much appreciated. Many thanks also go to **Yukimi, Yushin** and **Sho** who supported him.

Rev Watanabe says he will definitely take part in next year's marathon on 18 September 2022, hoping to join the actual face-to-face run on that occasion! As part of this effort, he would like to appeal for more people to donate towards a future home for Amida Buddha in Australia!



Result and certificate of the marathon run! (26/09/21)

BULLETIN

Virtual 2021 Sydney Marathon medal for all finishers.

Those who wish to join Rev Watanabe, please plan ahead to participate in this wonderful, exciting event!

In Gassho,
Rev Shigenobu Watanabe

Dharma message

- WHY SHIN BUDDHISM? - (Part 2)

Rev John Paraskevopoulos

We cannot hold on forever to those whom we love, to things we want, to the fame and fortune we have; in the end, we must part from all these. How empty the years seem as our life dwindles to a close. Think it through for yourself: even world-conquering kings cannot hold on to their high status and many treasures forever … Although we confront this kind of truth, we only pretend to understand it. Inured to a life hemmed in by desires, the ordinary person is not in the least astonished by the law of impermanence. Ah, how empty we ordinary persons are! ZONKAKU *1

Zonkaku Shonin

The Dharma exists to shed light on the nature of our existence and to afford us a true refuge amidst the many difficulties we face. If life always went smoothly and we felt no unease, the Buddha would have little to say to us. The many trials he underwent would have been in vain and his Enlightenment would've meant nothing. The Buddhist teachings, therefore, are offered as a strong remedy for our ailing hearts.

(Continues on page 3)

***1 Zonkaku** (1290–1373) was a renowned Shin Buddhist priest and scholar; son of Kakunyo, he was denied succession to the hereditary position of Monshu by his own father as a result of an estranged relationship. He was on good terms with all the major Buddhist schools of his time and was a creative thinker who also enjoyed widespread popularity among lay people.

BULLETIN

Volume 22 - No. 6
18 November, 2021

Hongwanji Buddhist Mission of Australia
PO Box 292 Lindfield (Sydney)
N.S.W. 2070 AUSTRALIA
Phone : (02) 9403-1256
Mob : 0412-396-014
Email : hbma@optusnet.com.au
http://www.hongwanji.com.au

Inside This Issue

Rev Watanabe completes the Virtual Marathon 1-2
Why Shin Buddhism? (Part 2) *by Rev Paraskevopoulos* 2-4
HBMA News / Sunday Service resumed 4
Hoonko Service nitification 4

Rev Watanabe completed the 42.2km Virtual Marathon for World Peace and the future of HBMA on Sunday 26 September 2021

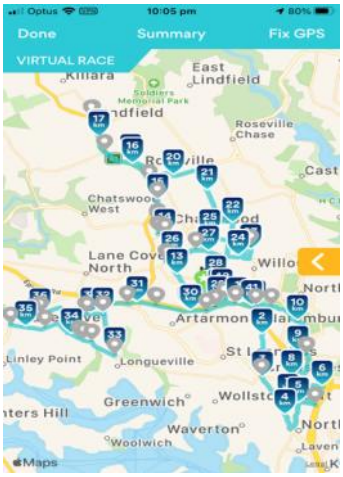
BLACKMORES VIRTUAL SYDNEY RUNNING FESTIVAL
THE RUN THAT'S STILL FUN FOR EVERYONE

Almost goal! (26/09/21)

Rev Watanabe once again made a pledge to run the full Marathon as part of the Sydney Running Festival 2021 in support of World Peace and the future permanent home of Amida Buddha in Australia.

However, we learnt that the "Blackmores Sydney Running Festival 2021" originally planned on the 19 September was once again cancelled because of another COVID-19 lockdown. This was really disappointing for all concerned.

However, the organising committee gave runners an another chance to participate in this year's running festival by having them join the "Virtual Run". All participants had to use a running application on their mobile phones and then reported the result after completing the run between 19 September and 16 October.



Because of Covid restriction the course had to be within 5km from home! (26/09/21)

Rev Watanabe of course registered in this virtual event and planned the course that would take. Because of this year's restrictions, we could not go more than 5km from home. So, his plan was to run three destinations. The first was North Sydney, followed by Lindfield and then Lane Cove (about 14km each way).

A week following from the original scheduled date for the Marathon, Sunday 26 September, Reverend Watanabe put his plan into action.

At 6 am, he departed from home with his wife, Yukimi, who accompanied him for a while during the beginning of the course. He then ran along Willoughby Rd and Pacific Hwy up to the biggest intersection of North Sydney near the train station. After running around the North Sydney and St Leonards Park area, he proceeded along Miller St up to Cammeray, then used the running trail and returned home (a total distance of 12km). After taking some energy food and drinks, he departed for Lindfield along Pacific Hwy then, upon his return, he ran around Chatswood which added another 16km to his run. For the final 14km, his sons, Yushin and Sho ac-

Yukimi accompanied for beginning portion of the run. (26/09/21)

Please attend

HO-ON-KO SERVICE

Sunday 28 November 11am～

Shinran Shonin
(1173-1263)

Please join in to attend the Ho-on-ko service commemorating Shinran Shonin, the founder of Jodo Shinshu. Let us celebrate his life and show our appreciation to Shonin at the new HBMA Hondo in Artarmon. Those who plan to attend the service, please bring one dish per family. In Gassho